



『個人課題研究』における情報ツールの利用と実際

—高校1-2年「17歳の卒論」実践報告—



三島 侑子

<抄録>

本校教育の要である『個人課題研究』における情報探索期において、各種情報ツールがどのように利用されているのか、その実際について報告する。

<キーワード>

学校図書館、探究学習、情報収集、オンラインデータベース、ラーニングスキル

1 はじめに

私が勤務する茗溪学園中学校高等学校は、茨城県つくば市にある私立の中高一貫校である。1979年に、研究学園都市つくばにおける研究者子弟の教育を目的として、筑波大学の同窓会である「茗溪会」により創立された。卒業後は、ほとんどの生徒が進学する。

本校では、生徒一人ひとりのトータルパフォーマンスの向上を目指し、「体験を通して学習し考える」、「必要な情報を自ら収集選択し、再構築する」、「思考し構築した情報を記述し表現する」といった活動を重視している。そのため、全学年を通して、調べてまとめて発表するいわゆる「探究型」の授業や課題、行事が多い。

その集大成として、高校2年生で取り組むのが、「17歳の卒論」とも呼ばれる「個人課題研究」である。

2 高校1-2年「個人課題研究」

個人課題研究（個人研：こじけん）は、創立以来30年以上行われてきた茗溪独自の必修科目である。

各個人で興味を持った課題（テーマ）を独自に準備し、課題指導者（各教科教員＋教育職員）の指導のもとで、1年間にわたり調査研究を行う*。

* 現在は高校1年秋頃から1年間。

生徒が取り組むテーマに制限はないため、ありとあらゆる事象から疑問や問題を発見し、課題を決定することになる。ほとんどの場合、自分の興味関心や進路に近いテーマを選択することが多い。

研究の過程で、大学や研究機関・企業等訪問、アンケート調査を行う場合もあるが、その場合のアポイント取

りや調査の段取りも、原則全て自分で行う。

また、論文提出後に行う研究発表会では、全ての生徒がスライドやポスター等を作成し、発表を行う。

3 個人研における情報ツール提供と実際

個人研を実施するにあたり、本校図書館は創立当初から「情報センター」としての役割を担ってきた。現在は、個人研スタート時のガイダンス等も担当している。

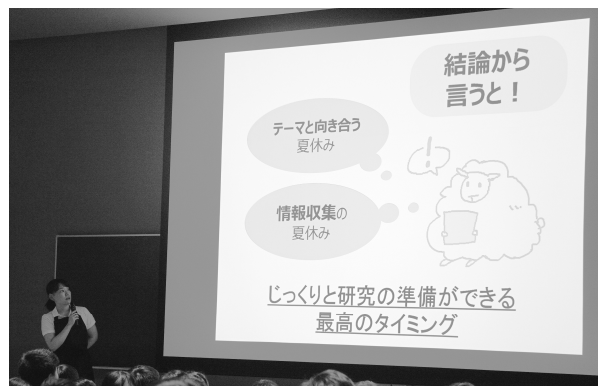


写真1 ガイダンスの様子

書籍をはじめとする従来メディアだけでなく、PC 機器関係を担当する情報教育部と連携して、新聞記事や辞書事典のデータベースも導入している。

私が勤務する図書館を中心に、生徒教職員が利用する情報ツールとその実際について報告したい。

(1) 図書資料

各分野の入門書や新書、世間で話題になった出来事や事件に関する資料等、個人研で利用する可能性を考慮して、多様なテーマを広く入手するようにしている。

個人研で利用される資料のレベルは幅広く、基本的には中学生～一般図書レベルの資料を収集している。

残念ながら、昨今の「読書離れ」という言葉が示す通り、自分に必要な図書資料を適切に選択し、満足に資料を読みこなせる高校生は多くない。

MISHIMA, YUKO：私立茗溪学園中学校高等学校(茨城県つくば市稲荷前 1-1)

数年前から高校1年生の情報科の授業で、「新書を選択して読む」という課題に取り組んでいる。自分に必要な知識を、資料から過不足なく入手するという経験の積み重ねが個人研には重要である。

今後は授業やガイダンス等を通して、中学生の段階から「知的な読書は楽しい」と感じられる機会を増やし、知的な好奇心を涵養していくことが課題である。

(2) 参考図書

研究において、キーワードや現状を正確に把握することは重要である。本校図書館では、辞書事典や統計といった参考図書（レファレンスブック）を積極的に収集するよう心がけている。

しかし、参考図書は一般図書資料以上に利用が少ない。現在は、レファレンスの際に司書が情報まで導いている状況である。中学生の段階で、いかに参考図書に触れさせるかが今後の課題である。

(3) 新聞記事 オンラインデータベース

オンラインデータベースは、朝日新聞社の『朝日けんさくくん』など数社の新聞記事データベースに加え、百科事典や辞書を収録している『ジャパンナレッジ』を契約している。

図書館で生徒が利用できるPCは5台（うち1台は蔵書検索専用PC込み）と少ないが、館内で無線LANを利用することができ、個人研中の生徒は個人用PCを持ち込むことができる。また、校内には自由に利用できるPCが多数設置されているため、生徒・教職員を含め、校内であればどこからでもインターネット経由でデータベースにアクセスが可能である。

本校図書館では新聞を12紙購読しているが、保管場所の都合上、1ヵ月しか保存できていないのが現状である。縮刷版も購入しているが、スペースの関係で数年分しか保存できていないので、新聞記事データベースは大変有用である。『朝日けんさくくん』については、2012年から導入を開始したこともあり、すでに多くの生徒・教職員にとって身近なツールとなっているようである。なお、『朝日けんさくくん』の使い方については、中学3年次に公民の授業で、自分の誕生日の新聞記事を検索するなど簡単な実習を行っている。

『ジャパンナレッジ』については最近導入したツールであるため、まだ利用は多くないようである。今後授業などで活用してもらい、利用を増やしたい。

(4) インターネット

インターネットは、生徒にとって最も身近な情報ツールである。図書館では、テーマ探索最初期の段階ではインターネット、特に Wikipedia 等のサイトから情報を収集し、キーワードを増やすよう指導している。

Wikipedia は論文作成において根拠にはなりえない。し

かし、テーマ探索序盤の段階では、対象に関する知識や情報が少なすぎるため、漠然とした問題意識で頓挫してしまったり、知識がない状態で難解な図書資料を見てしまったがために意欲を失ったりする生徒が少なくない。まずは手近な情報ツールからスタートし、参考図書、図書資料と進むよう促すことが多い。

(5) 学術論文

個人研においては、学術論文を利用する生徒も少なくない。生徒は、日本の学術論文データベース『Cinii』や、論文検索エンジン『Google Scholar』などを利用して論文を検索する。Web上で本文を参照できない論文については、図書館経由で国立国会図書館に論文の複写請求を行っている。なお、費用については図書館の予算で支出している。

4 『個人研』という体験から得るラーニングスキル

個人課題研究という取り組みは、単なる知識を得るだけにとどまらない。

自分のテーマを決定するためには膨大な知識が必要であること、効率的に知識を得るためには情報を取捨選択する技術が必要であること、また研究のモチベーションを維持するためには自分自身と向き合わなければならないこと等、体験を通して得られるものは計り知れない。図書資料とデータベース、その他多様な情報メディアを併用して知識を集め、自ら考える能力は、これからの時代を生きる若者にとって必須のスキルであるといえる。

学校図書館におけるデータベースの活用について、伊藤（2015）は「データベースは、使える環境にするだけでは利用されない。授業等で各種メディアの利用指導の場面があるからこそ、活かせるメディアである。」と述べている¹が、従来の図書資料や参考資料を含め、全ての情報ツールで同じことがいえる。個人課題研究を含め多くの授業で情報ツールが利用されるよう、発信していくことが、これからの課題である。

今後とも、生徒教職員の学びと知的な好奇心を支えるインフラとして、学校図書館をできる限り整えていきたい。

【参考文献】

¹ 学習情報研究, 伊藤史織, 2015, 「探求学習におけるデータベースの活用-中学3年「学びの技」での情報収集を支えるメディア」, 245, p.46-47